
僕が描いたのは、桃色に明る夢だった。

松の慎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕が描いたのは、桃色に明る夢だった。

【Nコード】

N2403K

【作者名】

松の慎

【あらすじ】

高校2年の瑠依は明るくて人気者で友達がたくさんいて、サックスの名手でもあるがある理由があり吹奏楽部には入ろうとしない。そんな瑠依の彼女は音楽教師兼吹奏楽部顧問の寧々。ある日瑠依は振られてしまうが、寧々の別れようとした本当の理由を知って瑠依は走りだした。「大好きなんだ。それ以上の言葉は出てこない……」瑠依のその気持ちに寧々は……。教師という立場と生徒という立場の2人に与えられた最大の試練。プロになることだけが夢なのではない瑠依にとって一番大切なものは、やっぱり寧々で。どうしたっ

て、大好きしか出てこない。許されない愛に2人が出した結末は…
…？

（前書き）

お久しぶりの短編投稿になります。どうぞお楽しみください。

人の夢とかいて、夢いといいます。

けれど俺の夢は、きっと愛しいといつてしょう。

「せーんせ。ほい、課題」

日直だった俺は教師に頼まれてクラスの人の課題を職員室まで持ってきた。

先生の机にドサツと置くと、先生はニコリと笑う。

「ありがとう。天野くん」

「溜依って呼んでよ」

「やつ、やだつ。こんなところ……」

そんなに慌てると余計に怪しまれるっていうのに、本当先生はおっちょこちよいだ。

先生は少し顔を赤くしながらうつむいている。

俺はそんな先生の耳元でコソツと囁いた。

「今夜行つて良い？」

「……オーケーしなくても来るくせに」

「あはは、わかってんじゃん」

口をちよつとだけ尖らせながらそう言う先生はとても可愛らしくて、つい苛めたくなる。

とりあえず課題も持ってきたことだし俺は先生に手を振って職員室を出た。

もうわかるだろうけど、俺と先生は付き合っている。

もちろん立場上の問題があるから公表はしていないし、こっそりとだけ。

先生、もとい野々原寧々は音楽の先生だ。

担任でもない彼女をなぜ好きになったのかというと、俺のサックスを聞いた彼女が泣いてくれたから。

その涙はとても綺麗で、泣きながら笑っている彼女について見惚れてしまった。

吹奏楽部の顧問でもある彼女は俺に何度も吹奏楽部へ入って欲しいと言ってきた。

そんな経緯で彼女とよく喋るようになり、照れたり笑ったりする顔がとても可愛いと思った。

好きになった。

だから俺から告白して付き合うことになったのだ。

「溜ー依っ」

「おう、果林」

教室へ戻ろうと廊下を歩いていると、クラスメートの果林が後ろから声をかけてきた。

「ね、今日一緒にカラオケ行かない？」

「いつものメンツ？ どうすっかな、かったりいしなあ」

ため息をつきながら言うと、果林は俺の腕を軽く引っ張りながら「行こうよ」と言ってくる。

カラオケなんて行き飽きたし、それならサックス吹いてるほうが断然楽しい。

まあ俺はソロが好きだから部活には入らないわけなのだが。

「やっぱ止めとく。大会近いから練習するわ」

「ええ。瑠依いなきやつまんなあい」

「武が泣くぞ。お前にベタ惚れじゃんか」

「あたしは瑠依が良い」

「はいはい」

甘えた感じで果林はいつも俺にまとわりついてくる。

頭のとっぺんで毎日違うゴムでおだんごをしている果林は、けっこう男子からの人気もある。

普通に可愛いし人懐っこい性格もしているから男ウケは確かに良い。

でも俺はこういう活発な子より女の子らしい感じの子のほうが好きかな。

そう、ちょうど寧々みたいに。

なんて。

「ほう。また大会があるのか。いつだい？」

「あ、えつと再来週の………げっ！ 山ちゃん！」

「ったく。また授業サボって大会か。認めんぞ」

山ちゃんは俺のクラスの担任で数学教師。

40代後半くらいで生活指導の担当でもある。

大会に行くとか言っただけで勝手に授業をサボっては山ちゃんに怒られているものだ。

「山ちゃん。未来のスターを潰す気？」

「だから部活入れて言ってるだろ。そしたら授業抜けて大会行っ

ても良いんだから
「それはやーだ」

俺が部活に入らないのにはわけがある。

小さい頃からサックスをやっている俺はコンクールでよく賞を取っていた。

自信満々で中学の吹奏楽部に入ると、やはり俺は1年にしてソロまでやらせてもらえた。

素直に嬉しかったし当然だと思っていたから、周りの気持ちなんて無視していた。

違う、周りを見えていなかったんだ。

部長がやるはずだったソロを横取りしたことも、先輩がやるはずだったパートもやることになったことも気にしていなかった俺への罰。練習中カッとした部員が俺のサックスを投げ、サックスは壊れてしまった。

ショックだった。

先輩たちと口論してケンカして、俺はコンクール直前に退部した。

せめてもの復讐として、コンクールがめちゃくちゃになってしまえば良いと思った。

思惑通り俺がやるはずのソロやパートをカバーしきれずコンクールは失敗に終わったと聞いた。

それでも誰も、吹奏楽部の奴らも教師も俺を責めなかった。

「お前ほどの名手が部活に入れば吹奏楽部も良いとこまで行くのになあ」

だから俺はもう二度と部活には入らないと誓った。

例えば寧々が顧問でも、やっぱり同じことがあつたらと怖くなるんだ。

寧々にこの話をしたのは付き合い始めて少ししてから。

それ以後寧々が俺を吹奏楽部に勧誘することとはなくなった。

「まーた山ちゃんとからんでんの？ 瑠依」

「二ノ宮」

「暇人だなあ、山ちゃんも」

「あ、涉に葉菜」

果林だけでなくワラワラと生徒たちが集まってくる。

男女関係なくクラス関係なく見慣れた顔たち。

「あー…… 本当人気者だな、天野」

教師もため息をつきながら失笑している。

人気者…… かどうかは知らないが、まあ確かに友達が多いほうだと思う。

成績も割りと良いしスポーツも得意なもの多いから、これとサックスも合わせるとけっこう幸せな毎日を送ってるんだろうなとしみじみ思う。

堂々と付き合うことはできないけど彼女もいる。

他に望むものなんてないくらいに、恵まれている。

「ちなみに理由を聞いておきましょうか。天野くん」
「あ、これ？」

俺は髪の毛を指差しながらヘラツと笑う。

わかってるならやってくるなと怒られ、結局そのまま生活指導室へ連行されてしまう。

昨日までは茶髪だった髪の毛は今日からオレンジ。

もうすぐ大会だから気合い入れたんだって言ったら山ちゃんにチョップされた。

入学式の次の日から髪の毛を染めてきた。

たぶん最初は赤系茶色。

それから黄系茶色で紫系にしてピンク系にして……他に何かあったかな、とりあえず最近我真っ茶色にしてて今に至ると。

怒られてまで髪を染めることに何の意味も理由もない。

ただなぜかときどきすべてが嫌になって、で、そんなとき染めると気分が晴れる。

いわばストレス発散とでも言おうか。

こんな日々を暮らしてる俺は普通かもしれないけど、その普通が普通であることのありがたみをとくとき実感する。

放課後になり、果林たちは本当にカラオケに行っているようだが俺が向かうのは今は使われていない第2音楽室。

普段から使われている第1音楽室は4階にあり今は吹奏楽部が使用しているが、第2音楽室は5階にある。

無人の音楽室だが俺がよく使用するせいで割りと綺麗にしてある。

寧々が片付けてくれただけなのだが。

空気入れ替えのため窓を開けて、いつも持ち歩いてるサックスをケースから出す。

瑠依がサックスなんて意外だと言われることもあるけど、俺はサックスが大好き。

賞を取りたいだけでなく、ただ純粹に吹くのが好きなんだ。

サックスを吹いていながら誰にも囚われないですむこの瞬間、嬉しくもあり悲しくもある。

ソロが好きなのは確かだけど、俺だって吹奏楽部で頑張りたいって思っていた。

吹奏楽部から逃げ出した俺は、とても弱い。

「瑠依くん」

けど、それでも良いよって受け止めてくれる人がいる。

「ああ、寧々」

「綺麗な音色。あたし瑠依くんのサククス大好きよ」

第2音楽室に来た寧々は軽く拍手しながらそう言う。

俺はサククスを机の上に置き、寧々と向き合う。

大学を卒業してまだ2年目の彼女は、俺より7歳年上のはずなんだけどそう思わせない容姿をしている。

焦げ茶色のストレートの髪の毛は背中まであり、前髪にはピンクのピンがついている。

「部活は？」

「これから行く。ふふ、瑠依くんの音を参考にしろってあたししょっちゅう言ってるの」

「それはそれは、」

なんでこんなところで吹くのかって？

寧々に聴かせるためだ。

寧々が俺の音が好きだって言うてくれたから時折ここでこつやって練習している。

「……寧々」

そよ風が吹いてくる、誰もいないこの教室。

俺は優しくそつと寧々の頬に手を触れる。

寧々は少しばかりニコツと笑い、俺は寧々にキスをした。

唇を離すと、寧々は照れているのか軽く視線を下にした。

そんな寧々が可愛くて、俺は寧々の顎をクイツと上げて今度はさつきよりも長く深くキスをした。

ここでキスするのは初めてではないし、しかも第2音楽室なんて普段誰もこないものだから油断していた。

このあとどうなるかなんて、このとき俺にはまったく分かっていなかった。

「え……？　今なんて……」

俺の夢は一番好きな人と家庭を築いて、プロになった俺のコンサートに時折家族を招いて、そして幸せな毎日を送ること。

「だから、あたし好きな人ができたの。社会人」

「う……嘘だ！」

「あなたみたいな子どもの相手はもう終わり。恨んでくれても構わないから」

このまま行けば俺の夢は確実に叶うって思っていた。

けれどもある日、夢芝居は一気に崩れ落ちる。

いつもみたいな可愛い笑顔でもなく恥じらう顔でもなく、冷めきつた目で軽蔑した目で俺を見ながら寧々は、感情のない声で別れの言葉を言った。

「待てよ！ 寧々！ 待って！！」

立ち去ろうとする彼女の手を握ると、寧々は勢いよく俺の手を振り払った。

俺を見ることなく、寧々はそのまま行ってしまふ。

「なんでっ……俺まだ好きだから！ 俺が学生だからダメなのかよ?! お前と同じ社会人だったら好きでいてくれた?!」

夜中の公園。

10月ともなるとさすがに冷えてくる。

真つ暗な闇に消えていく寧々の後ろ姿にこれでもかってほど叫び続けた。

「年なんか気にしないって言ってくれたじゃんか……！　ばか野郎
っ……！！」

けれど俺の声も闇の中に落ちていくだけ。

こんなにも好きなのに、こんなにも愛しているのに届かない。

昨日まで幸せだったのに、どうして急にそんなこと言っただ。

俺が大学卒業したら結婚しようって、あれ嘘か？

ずっとずっと……未来永劫一緒だって言っただのも全部嘘だったのか。

「くそっ……っ……」

俺はその場に崩れ落ち、公園の土を拳でドンドン叩く。

そのうち涙が落ちては土に染み込み消えてなくなり、そしてまたこぼれ落ちる。

真夜中の公園が冷えきっているように感じるのは、人気がないせいか風が吹いているせいかな。

俺の心が泣いてるせいか。

誰も見ていないけれど、俺は声を押し殺しながら嫌ってほど泣いた。

そのうち土には染みきれずに俺の涙がたまっていく。

明後日が大会だとか、そんなこともお構いなしに泣き続けた結果俺は夜風で冷えたために風邪をこじらした。

風邪なんていつもなら一晩寝れば治っていたものの、精神的に陥っ

ていた俺は1週間近く学校を休んでしまった。

友達から何回もメールや電話がきたり、見舞いに来てくれる人もいた。

けれどどんなにみんなが心配してくれても心の病だけは治らない。

体の病は治ったから学校へ行ってみると、クラスメートたちや他のみんなも俺の登校を喜んでくれたけど、寧々だけは決して声をかけてこなかった。

目すら合わせようとせず、俺を無視するんだ。

放課後サックスを吹いても寧々が現れることはない。

虚しく哀しい音色ばかりが学校中に響くんだ。

こんなこととしてまで演奏する意味ってあるのだろうか。

寧々が好きだと言ってくれたからここで吹いてるのに、もうそんなことは言ってくれない。

けど、いつかまたひょっこり現れて「瑠依くん上手ー」なんて言ってくれるんじゃないかって心のどこかで期待してる気持ちもあるんだ。

いつもみたいに窓を開けて窓辺で吹いていればグラウンドにまで音色は響き、きっと1つ下の階にいる吹奏楽部にだって伝わっている。

吹奏楽部に伝われば、顧問している寧々にも届く。

届きさえすれば、きっと俺のこの思いは伝わるに違いないって……
そう思ってる。

未練がましいって思われても、しつこいってウザいって言われてでも、それでも俺は今でも寧々を愛してる。

せっかく頑張って練習してたのに大会出れなくて残念だって二ノ宮は言った。

確かに出れないのはすごく悔しかったし齒がゆい。

それでも寧々を責める気にはなれなかったんだ。

ああ、中学のときの吹奏楽部の奴らもこんな思いだったのになって、
今更になってようやく理解できた。

責めたくても責められない。

違う、責めることはできない。

哀しい哀しい

哀しいって、それだけ。

「溜依」

ドアのところで俺の名前を呼ぶ声がした。

「寧っ……………あ……………果林か、」

「誰だと思った？」

「えっ、」

珍しく果林がおだんごをおろしていたものだから、寧々かと思った。

なんて言えるわけない。

「ねえ、話があるんだけど良いかな？」
「ん？ おう」

果林は音楽室に入ってきて、俺の目の前に立つ。

ああ、本当なんでそんな髪型してるんだろう。

ピンクのピンまでつけてまるで寧々みたいだ。

サラサラなストレートの髪が大好きだった。

寧々を抱くとき、いつもあの髪の毛に口付けしてた。

……どうやったら忘れられるんだろう。

どうやったら新しく好きな人なんてできるんだろう。

「あたしね、ずっと瑠依のこと好きだった」

「えっ、」

「付き合っただけなの」

果林はいつになく照れながら告白してくれた。

「あ……や、俺、」

「彼女いるの？」

「彼女はいない……けど」

「けど？」

と、そのとき何やらドタドタと廊下を走る音が響いた。

何かと思いながら見てみると、二ノ宮だった。

二ノ宮はようやく見つけたと言わんばかりに第2音楽室に入ってきて、全力で走ったせいで疲れたのか膝に手を置きながら呼吸を整えている。

「に、二ノ宮？ 何した？」

「野々原がっ……辞職するって！」

「——え？」

耳を疑った。

一瞬寿退職でもするのかとも考えたが、寧々は好きな人ができたとは言っていたが彼氏ができたとは言わなかったし、二股かけられるほど器用な女でもない。

俺の知っている寧々は、子供みたいに喜怒哀楽の感情がすぐく出ていて、けれどいつも笑ってばかりで、俺の演奏をにこにこ嬉しそうに聴いているんだ。

おっちょこちょいでドジなところもあるけどそんなところが可愛くて、寧々が同級生だったらみんなに公表して自慢して、絶対他の男になんか渡さなかった。

社会人が好きだと言われてしまったら、「コドモ」の俺はどうすれば良い？

寧々より精神的年齢が高くても、実年齢は成人にも満たない子供で、しがない高校生で、誰かの援助なしでは生きられないガキだ。

そんな俺が嫌だっというのなら仕方ないと思った。

けれど

「……悪い！ 果林、俺行かなきゃ！！」

「ちよっ……」

「好きな奴がいるんだ！」

俺は果林を置いて教室を出て行こうとする。

二ノ宮も俺と一緒に走ろうとしたが、予想外の果林の叫び声に2人して足を止める。

「先生に恋したって不毛だよ！！」

俺たちが振り返ると、果林は少しうつむきながら続けた。

「あたし知ってるんだから……！！ 野々原先生と付き合ってることも、ここでキスしてたことも！！」

果林の言葉に俺はどう反応して良いか分からず、ただただ固まった。

親友の二ノ宮にでさえ話していないことをまさか果林が知っているとも思わず、しかも果林に見られていたなんて考えたこともなかった。

今この場をどう切り抜ければ良いのか分からず、冷や汗が出てくる。

俺はまだ良い。

だけど教師という立場上寧々が危なくなる。

……危なくなる？

寧々は学校を辞めるんだろ？

なぜ？

「果林……まさか、お前……」

信じたくはないが、俺は恐る恐る果林へと言葉を向ける。

果林は罰が悪そうな顔をしながら俺から顔を反らす。

友達だと思っていた。

確かにその友達を信用せず黙って寧々と付き合っていたのは本当だけど、でもバレたって見守っていてくれると思っていた。

……ああ、そうか。

果林は俺のことを好いていてくれるからか。

果林を責めることもできず、この場から立ち去れないでいる俺に代わって言ったのは二ノ宮だった。

「瑠依が処分されてないところを見ると学校側にはまだ言っていないよ
うだけど？ 何、野々原に詰め寄ったわけ？」

「二ノ……」

「みんなにバラされなくなったら瑠依と別れるとでも言ったんだ
？ しかも学校も辞めろって？ 最低だな、お前」

二ノ宮はいつになく真剣な目をしながら、その雰囲気は怒りに満ち
ている。

腕を組みながら果林を睨んでいる二ノ宮に果林は少し怯む。

「お前、女だからって何しても許されると思うなよ」

こんな二ノ宮俺でも知らない。

中学からずっと友達やってるけど、優しくて穏やかで時に明るい二
ノ宮は決してこんな言葉を言ったりはしない。

あるときだって……俺が吹奏楽部を辞めたときだって何も言わずに

側にいてくれたんだ。

「に、二ノ宮……」

「……俺が知らないとも思った？ 瑠依」

「え……」

二ノ宮は少しだけ果林に向けていた顔を俺にも見せたが、次の瞬間にはいつもみたいに穏やかな表情を浮かべた。

「信用してよ。俺親友のつもりだけど？」

「そんなんっ……俺だって！」

「とにかく野々原のところに早く行け。手遅れになるぞ」

「で、でも……」

俺がチラッと果林を見たことに二ノ宮は気づき、あとは俺がなんとかするからと言って俺の背中を押してくれた。

俺は何も言わずにその場から走り去った。

別れたあの日から一言も会話をしなくなってしまったけど、だいたいせつかく別れたのになんで辞職までしなきゃいけないんだ。

別れたんならもうやましいことはなにもなくて、これからは寧々は生徒じゃない社会人と堂々と恋だってできるんだ。

いや、違う。

もし二ノ宮の言っていることが本当だったとしたら、好きな人ができたという話も嘘なんだろう？

俺のために別れを決めたんだろ？

俺はまず第1音楽室へと向かい、その次に職員室に向かう。

いそうな場所をとにかく探してみるが寧々は見当たらない。

校舎内を走っていることで時折教師に注意されたり、しかも髪の毛のこままで言われたりもしたが珍しく俺はそれらの説教を無視して走り続けた。

あとでどうなるかまで考えてる余裕はないし、あとのことはどうだつて良い。

とにかく今、寧々に伝えたいことがあるんだ。

「ねっ……………」

廊下を走っていると、自分の教室に女性が1人立っているのが見えた。

制服を着ていないし、その後ろ姿を俺が見間違っはすもない。

教室にはもう誰もいなくて、寧々は窓からグラウンドを見下ろしていた。

切れる息を必死に整え、俺は教室のドアを開けて怯むことなく躊躇いもせず教室に入って行った。

振り向いた寧々が俺だと認識するやいなや、寧々は驚きの表情をしてみせた。

俺は寧々に近づいていき、寧々に尋ねる。

「……辞職するって？」

「あ……もうその噂広まってるの」

「なんで？」

「天野くんには関係ないでしょう？」

それだけ言って寧々は俺に背を向け、再び窓の外を見ている。

グラウンドなんか見たって運動部が活動してるだけなのに、しかも全

然興味なんかなくせに。

「……俺の過ごした教室を見ておきたかったんだろ？」

音楽教師の寧々は音楽室で授業をするから、当然教室で受ける俺の授業風景なんか知らないし何か用でもない限り教室なんて普通訪れたりしない。

うぬばれてはいけないだろうか。

寧々の脳裏には最後の最後まで俺がいるということ。

「たまたま入っただけよ」

「嘘つけよ」

寧々は決して俺に顔を見せずに、少しトーンの低い声で言った。

「……あたしたち別れたのよ。こんなとこ誰かに見られたらどうするの」

「知るかよ。その別れた理由だって果林になんか言われたただけだろ？！」

「違う。言っただけじゃない、好きな人できたって」

「俺が退学になるのが嫌なだけのくせに！ ふざけんなよ！！」

「天野くん、声大き……」

「天野くんって呼ぶなっ……！！」

我を忘れてしまいそうなほど、頭にきている。

寧々の背中にいくら訴えかけても寧々は振り返ろうとすらしない。

もう今まで通りにはいかないことくらい俺にだって分かる。

寧々が俺を心配してくれての行動だってこともちゃんと理解してる。

だけど、何も言わずにサヨナラなんて嫌なんだ。

大好きなんだ。

「退学になっても良い。批難されても良い。俺はそれでもお前とい
たいんだよ……」

「……そんな子供の言い分よ」

「子供だろ？！ お前よか7歳も年下のただのガキだ！」

初めて自分は子供だと実感した。

学校を辞めたところで寧々を養うこともできない。

自分で言っておきながら惨めになる。

「本当、退学になっても良いんだ……。寧々と離れるくらいなら」
「……だめだよ」
「もうお前しか見えないんだよ……他にはなにもいらない」

俺は背後から寧々を抱きしめる。

寧々は驚いた声をあげて軽く抵抗するが、俺は離さなかった。

「大好きなんだ。それ以上の言葉は出てこない……」
「天……」

「どうしたって、大好きしか出てこない」

別に楽しいことや面白いことをしなくたって、ただ側にいれるだけで幸せだった。

それ以上望んだことはないし、望まない。

「……………どうして？」

かすかに寧々の肩が震えている。

顔は見えないから分からないけど、泣いているようにも思えた。

「あたし、あんなにひどいこと言ったのに……」

「ひどくない。俺のための優しい嘘だ」

「瑠依くん突き放して……大事なコンクールにも出れなくて……」

「コンクールより寧々のほうが大事なんだよ」

「あたし……最低なのにつ………」

寧々は手で顔を覆う。

涙声の言葉は、今度こそ寧々の本心だ。

今この瞬間だけは、寧々を独り占めできる。

俺は寧々をそっと離して、寧々の目の前に移動する。

寧々はほんの少し顔を覆っている手を離して、俺を見た。

久しぶりに目を合わせる。

「寧々、もう二度と聞かない。だからどうか答えて欲しい」

普段ヘラヘラしておちやらけている俺が、久しぶりに真剣な顔を寧々に見せた。

告白したときぶり。

きつとここが人生の分かれ道となるだろう。

寧々の答え1つで道は大きく変わる。

「果林の気持ちもこれからのことも真剣に考えた上で、それでも俺は寧々といたい。ここで他のことを抜きにして寧々に好きだなんて軽々しくは言えない。だから、全てを抜きにせず考えた上で……寧々の気持ちを聞かせて欲しい」

それでもやはりいろいろなことを含めて考えたことで別れたいというのなら諦めよう。

けれど、全てを考えた上で俺を選んでくれるのなら、俺は絶対寧々を幸せにする。

絶対なんて保証はないけど、自信があるんだ。

俺以上に寧々を想う奴はいないと。

だから絶対に逃げたりはしない。

「……」

寧々は手を顔から完全に離し、服の裾で涙を拭っている。

珍しく巻いてある髪、ピンクのピンをつけていない前髪。

いつも見てきた髪型とは全く違うし、泣き顔すら初めて見た。

なかなか答えを出そうとせず、寧々は黙っている。

でも俺は催促はせずに寧々が言ってくれるのを待ち続けた。

おそらく時間にしたら2分やそこらしか経っていないだろう。

けれど今の俺にはそれが2時間くらい過ぎているかのように思える。

部活をしている生徒しかもういない時間帯の放課後、教室には俺と寧々しかいなくて静まりかえっている。

グラウンドから運動部員たちの大きな声や、時折鳴いている鳥の囀りさえ俺の耳には入ってこない。

こんなところもし生徒や教師に見られたら、今度こそ本当に疑われてしまうかもしれない。

もっと状況が悪くなる場合もあるかもしれない、けれどそんな状況を踏まえても、やっぱり俺は今この場で寧々の気持ちを知りたいんだ。

ノーでも良い。

どうしても立場上の問題には抗えないのなら、それでも良い。

ただ俺は、寧々の本当の思いだけを聞きたいんだ。

「溜依くんの……音色好きだった。自由で、本当に音楽が好きなんだって……最初思った」

「……」

「あたしのお願い、聞いてくれますか……？」

それが俺と寧々が交わした、最後の約束となった。

「オーボエ、遅い！ 周りに合わせる！」

高校3年の冬、最後のコンクールを終えて吹奏楽部3年は引退をした。

寧々は、俺たちが言葉を交わしたあの日から数日して辞職した。

寧々が辞職した後、俺は吹奏楽部へと入部届けを提出した。

俺の実力を知っているみんなは、快く俺を受け入れてくれた。

また、寧々が辞職するにあたって俺は校長に寧々と付き合っていた事実を話した。

一緒に校長室に向かい、校長室で校長と話し、校長室を出たあと俺と寧々が言葉を交わすことは一度たりとなくて、俺たちはサヨナラさえ言わずに別れた。

結果として俺は3日間の停学という処分で、これは寧々が辞職をすることによって軽くされたんだと思う。

噂はすぐに広まり、俺を冷たい視線で見たり後ろ指を差されたりもしたけど、そういう人間だけではないということも知って救われた部分もある。

「ひーっ、厳しー……さすが部長」

「部長はお前だろ？」

「あはは、そうでした」

つまりは、寧々がいなくなった吹奏楽部に入った俺を吹奏楽部員が冷たくあしらったりするはずがなかった、ということ。

寧々の願いとは、俺が吹奏楽部に入ることだった。

俺の過去を知った上で、やはり吹奏楽部に入って演奏してもらいたいと寧々は笑って言った。

どうしようか迷うことなく、俺は寧々の願いを受け入れた。

そうして俺らの淡い恋は終えたんだ。

「なあ溜依」

俺は去年の冬のコンクールで大活躍を見せ、その後部長に就任する。

入部してまもない俺で良いのか分からなかったが、寧々のことや俺の実力、そして俺の気持ちをいろいろ踏まえてみんなが俺を推してくれた。

そんな俺が断るはずもなく、俺は部長として3年のコンクールでも目覚ましい活躍を見せたつもりだ。

「ん？」

引退はしたが、指導してほしいと下級生たちに頼まれてはちよくちよくこうやって部に顔を出している。

暇な3年がいたら一緒に連れてきたりして、まあ今日は卒業式をさつき終えたところで、下級生たちが俺たちに演奏を聞かせてくれた。

感動のお別れ会を終えて、今こうして再び指導にあたっているのだ。

「お前音楽の名門大学の誘い断ったって？」

「あー、ああ」

「なんで?! お前ならあそこでも良い成績残せて将来だって……
!」

「うん。そうかもだけど、でも俺は俺の夢を叶えたいんだ」

吹奏楽部に入って全国にうちの高校の名前と俺の名前を残し、けれど俺はこれ以上ここに意味はもう何もないんだ。

「もう発つんだろ? またすぐに遊びに来いよっ」

「おう」

「俺らのこと忘れんなよ!」

「あはは。あつたりまえ」

そんな話をしていると、吹奏楽部以外の卒業生たちも音楽室にわらわらと集まってきた。

今日をもちましてサヨナラする俺の友人たち。

「おーす、瑠依。たまには帰って来いよ」

「もー。瑠依くんいなくなるなんて嫌！」

「絶対絶対瑠依くんは幸せにならなきゃだめだよ!!」

「瑠依！俺らお前の道良いと思うぜ!!」

いつだっけ、前に山ちゃんが俺にはたくさん友達がいるみたいなの
と言ってた。

その数多の友達たちがこうして俺の将来を心配して応援してくれて
いる。

1人じゃないってすごく心強いんだ。

だから、1人でサクスを吹いているときよりも吹奏楽部に入って
演奏したほうが何十倍も楽しかったんだ。

そういつたら部員がみんな泣いてくれたっけ。

「瑠依」

「あつ、二ノ宮。わりいわりい、吹奏楽部につかまってた」

笑いながらそう言つと、二ノ宮もつられて少し笑いながら言った。

「いよいよだな」

「おう。ほんと、お前にまでいろいろ迷惑かけたけど」

停学あけの初めての登校、みんなから仲間はずれにされたりバカにされたり冷たい視線で見られるんじゃないかとドキドキしていた。

でも、二ノ宮はそんな俺のためにわざわざ家まで迎えに来てくれた。

停学中だつて会いに来てくれたし、俺が落ち込まないよう明るい話や面白い話をきかせてくれて、寧々のことを全て話したときだつて二ノ宮は黙って聞いてくれた。

たぶん、俺が周りからあまり悪く言われずにすんだのは二ノ宮のおかげだと思う。

俺の知らないところでいろいろ手をまわしてくれていた。

「ははは。ほんとだよ」

二ノ宮は軽く俺の肩を叩く。

「だけど、お前の門出を嬉しく思ってたのも本当だぜ」

「二ノ宮」

「お前ほど良い奴っていない。だから絶対幸せになれ。ちゃんと連絡よこせよ？　んでもって泣きごとは聞かないからな」

俺に言わせてみれば、二ノ宮ほどの良い奴のほうがそうそういない。

俺なんてただ明るくてお調子者なだけで、二ノ宮はいつだってそんな俺を助けてくれた。

本当は二ノ宮と同じ大学に行って一緒に遊んだりしたいけど、二ノ宮が目指しているのは医者だから全く違う道を歩むことになってしまった。

「ああ。ありったけの楽しい話聞かせてやる！」

桜が咲く中、俺は今日卒業した。

3年間過ごしたこの高校ともサヨナラして、新たな道に行く。

楽しいことばかりの高校生活、あつたのはたった1つの哀しみでした。

その哀しみを背負い、俺は歩いていく。

「……二ノ宮。本当ありがとう」

俺は右手を差し出した。

「瑠依」

「お前に救われたこと、きっと忘れない」

「——おう」

二ノ宮はいつになく力強く俺の手を握った。

吹奏楽部員、同級生、友人、中には下級生も交えて、みんなが俺たちのほうを向きながら優しい顔を見せてくれている。

安心の気持ちでいっぱいになって、少しだけ感極まって泣いてしまいうそになるけどどうにか堪えた。

これから進む先、大変なことのほうが多いだろう。

嫌になって投げ出したくなることもあるだろう。

でも俺は絶対に振り返らない。

それが俺なりの、精一杯の恩返しだから。

「じゃあみんな、行つてきます！」

俺はみんなに手を振り、思い出いっぱい音楽室をあとにした。

髪の色をまた派手に変えて、しかも昨日にはピアスの穴まであけた。

山ちゃんは怒りを乗り越して失笑していたし、友達にはバカだと笑われた。

詳細は二ノ宮にしか話してないけど、俺が有名大学を蹴ったことでみんなにも簡単にバレてしまったようだ。

祝福してくれる人たちもたくさんいるからそれはそれでありがたいけど。

最小限のものだけ持って、とりあえず今日は情報を頼りに探してみるさ。

俺は、数日分の荷物だけ持って、制服を身に付けたまま新幹線に乗り、その目的の場所まで向かう。

あれからすぐ、果林は俺に謝ってきて、それから寧々の居場所とかを友達何人かと突き止めてくれたようだった。

俺は果林のことを憎めないし怨めないし、そこまでしてくれたことに本当に感謝をした。

その場ではもちろん話を聞かないように「教えてくれなくて大丈夫」と言ったが、果林がこっそり俺にメールで教えてくれたんだ。

そのメールを保護し、俺は高校を卒業するまで決して会いに行かないと決めていた。

卒業した今日、ようやく俺は寧々に会いに行ける。

まったく知らない土地、田舎とまではいかないが俺がいた都会よりは田舎。

ここが寧々の住んでいた故郷。

「えーと……ここの高校だよな」

寧々はうちの高校を辞めたあとも、ここの高校で音楽教師として働いているらしい。

そしてたぶん、また吹奏楽部の顧問をしているに違いないんだ。

俺は勝手にこの高校に入り、しかもよその制服を着たまま校舎の中を歩いている。

おそらくここも今日が卒業式だったんだろう、もう誰もいない。

とりあえず音楽教室がどこにあるのかうろちよと歩いてみるが、意外に広い高校なもので歩くのが面倒くさくなり俺は適当な教室に入って、やっぱり持っているサックスで演奏し始めた。

この土地で初めて吹くサックス。

澄んだ空気に新鮮な光景、それだけで俺の心持は変わる。

そのうち、バタバタと廊下を走る足音が聞こえてきた。

俺は構わずサックスを吹き続け、教室のドアが開かれてからようやくその方向を振り向いた。

「……………瑠依くんっ……………?!」

そこには春らしくピンクと白のコントラストの服を着て、さらさらなストレートヘアにピンクのピンを前髪にとめている寧々がいた。

ああ、1年ぶり。

正確には1年と4ヶ月ぶりに見る。

「寧々。久しぶり」

「なんで……………」

「高校卒業したよ。俺たち、これでもう生徒と教師じゃないよね」

俺はサックスをケースに戻し、ドア付近で立ち尽くしている寧々に近づいた。

まさか俺がこんなところにいるわけがないと、寧々はかなり驚いて

いて、目が見開いている。

俺たちは、吹奏楽部に入って欲しいという寧々の答に俺が返事を
して、それ以外はもう何も言い合わなかった。

寧々なりに精一杯考えて、やっぱり俺のためを思ってイエスと言わ
なかったことを理解したし、寧々の最後の願いを聞けるのなら本望
だと思った。

だけど

「やっぱり寧々に会いたくて」

どうしたって忘れられないんだ。

この気持ちを抑える方法を知らない俺には止めようがなかった。

「だ、大学はっ……」

「こっちの大学受けたんだ。無名かもだけど」

「溜依くんならもつと上を目指せて……」

「どこでもプロにはなれるよ」

寧々は見開いている目に涙を貯めている。

頬をつついたらすぐに涙が零れてしまいそうだ。

「だけど、俺の夢を叶えるためには寧々が必要なんだ」

俺は最大級に笑って見せた。

寧々は零れる涙を振りし切って、俺に勢いよく抱きついてきた。

久しぶりに感じる寧々の体温。

懐かしいぬくもり。

俺が愛した全て。

「わあああゝっ!! ……溜っ……………ごめ……………っ……………」

あのような哀しい涙ではない。

大声でまるで子供のように泣きじゃくる寧々は、とても愛しいと思える。

今この手で、ようやく寧々を抱きしめられる。

「話したいこと、たくさんあるんだ。聞いてくれる？」

叶えたい夢があるんだ。

日本一のサックス奏者とか、世界的に有名になりたいとか、お金持ちになりたいとかそんなちっぽけなことなんかではない。

俺の夢は一番好きな人と家庭を築いて、プロになった俺のコンサートに時折家族を招いて、そして幸せな毎日を送ること。

プロになれたところで、将来が約束されたところで寧々がいなかったら叶えられるものではないんだ。

この溢れだす気持ちを全部君に伝えたい。

言葉にできないこの気持ちを全部君にあげたい。

だって前にも言っただろう。

「はいっ……」

大好きって言葉しか出てこないんだ。

どうしたって、大好きしか出てこない。

永遠の愛を、今——……。。

f i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2403k/>

僕が描いたのは、桃色に明る夢だった。

2010年10月10日19時42分発行